

# 大学における英文学教育と英語教育現場での 文学教材使用の実践的研究

— Samuel Richardson の *Clarissa Harlowe* (1748-49) の内容理解と音読 —

植木 研介・小野 章  
広島大学文学部・広島大学教育学部

## はじめに

広島大学文学部における散文の英文学教育を実践する中で、1989年度（平成元年度）から授業で読み続けている *Clarissa Harlowe* を、読み解き理解する学生の英語力が顕著に衰えてきた現象が、この研究の発端となった。英語の発音、読解の力と速度、文学的解釈力、いずれの点を取っても頭を抱え憂える現状が顕在化してきている。かつては、それは15年前のことであるが、学生を指名して英語の原文を音読するよう指示すれば、その音読によって聞き手が原文を見ないで文章をそれなりに理解できるレベルの発音とリズムを持って学生が英語の文章を読むことが可能であった。したがって、後は意味を取り、解釈する文学的作業に入れたのである。主として英文学を学ぼうとする学生にむけたイギリス散文学の講読演習であり、原文を読まなければ文学論の入り口にもたどりつけない。ところが数年前からそれが極めて困難になってきた。

こうした読解力の衰退の実態はどのようなものなのか、どうして、この文学作品を読む時の英語力の後退が起こったのか、その現状に演習や講義の中でどう対応していけばよいのか、その解決策を求めての模索がこの研究の中心的テーマである。

現在日本は、いな日本だけでなく地球上の国々や地域は互いに国際化して、ボーダーレスな社会となる時間の中にある。その時代の動向の中で、固有の文化をそれぞれの文化が保持する視座も重要な課題であるが、その一方で、その経緯はともあれ、また事の善悪はここでは問わないこととするが、事実上英語が共通語化し、自然言語のレベルにおいて、コンピュータも考慮の内に入れて、あらゆる領域で英語がコミュニケーションの媒体（メディア）として中心的な役割を担いつつある。その直中でコミュニケーションの手段としての媒体教育・英語教育の重要性が声高に叫ばれている時、少なくとも、広島大学にあっては英語の力が平均して低下してきている。どうも TOEFL など国際的に認められた試験における、日本人学生の結果の平均比較をみると、単純に諸外国と比較は出来ないとの、一瞥したところもっともらしい反対理由が幾つかあげられてきているにもかかわらず、日本全体のレベルも低下の傾向を持っているのではないかとの疑念が生じてくるのだ。疑念と言うより確証という形のデータが突き付けられている。

ただし取り違えてもらっては困るのだが、このプロジェクトの目的は、英語教育のための有効な教材開発ではなく、英文学教育がまず条件としてあり、その中でどう指導して英語の力を、文学の読みの力を、付けるのがこのプロジェクトのねらいであることは明確にしておきたい。

植木が文学部の授業を通しての論考と成っているので、この論文の記述とともに主たる責任は植木にあるが、データの集計などには小野があたった。

## I. 授業の内容と学力の現状

### 1) 授業科目について

この論考の対象としている授業は、かつては「近代英国小説講読」という授業科目であった。1997年（平成9年）度からの学部改組により「イギリス近代文学演習」となっている。この授業科目で考えられていたのは、19世紀・20世紀の英文学作品を対象とする「現代英国小説講読」と対にして、主として18世紀に書かれた英国の小説作品を読むことが目的であった。したがって、かつては、スウィフト、ディフォー、リチャードソン、フィールディング、スモーレット、スターン等の小説作品を読むことを行っていた。1985年（昭和60年）度に *Clarissa Harlowe* を一度読んだが、この作品を継続して読むようになったのは1989年度からである。この作品を読み続ける理由はIの3)で詳しく述べる。文学的に密度の高い大部の作品を読むことで、英語を読み、英語の解釈の力を付けると共に、細かな文学的心理描写を味わって欲しいというのがその目的である。なおこの授業科目は必修科目ではない。

### 2) 受講生について

受講生数は年度によって差があるが、多いときが90名強少ないときが20名強である。学年は2年生で前期2単位、後期2単位となっている。受講生の多くは主として文学部の英語学英文学専攻の学生（1997年度からの改組で欧米文学語学・言語学コースの英文学分野の学生と変更）20名前後と教育学部の通称でいうなら（正式名称は、何度か変更されてきたため何時どう変わったのか詳細を確認していない。この変更自体が興味深い研究の対象だとはおもっている。）英語教育の学生30名前後である。教育学部の学生の場合、教育学や心理学専攻の学生、そして他の教科教育の学生も英語教育の教職免許状取得のために受講する学生がいる。同じように文学部の学生で英語教育の教職免許状を得る目的の他専攻の受講生もいる。さらに受講届けは出さずに受講する大学院を目指す学生も見られる。したがって学生としてはモチベーションの高い学生群を対象とした講義になっている。また理解しにくい難しい英語を読む授業であるが学生からの反応は、1995年度から始まった「文学部自己点検・評価」項目中「学生による授業評価」でのアンケートでは好意的反応が出てきている。

教育学部は西条キャンパスへの移転によるこれまで以上の学力不足となる学生の入学の可能性を念頭に置いて、早くからそれに対する有力な方策として2年次の後半にイギリスの3大学（エディンバラ、ランカスター、ウォリック）で半年間の留学研修を行っているの、データは2年次前期（3セメスター）を利用した。2000年度後半に行った教育上の試みは、教育学部英語教育の学生は受講していないが、文学部と教育学部の混成による学生群を対象にして行われたという意味ではデータの信頼性は保たれている。

### 3) テキストとした作品について

テキストとは何かという文学上のかまびすしい論争はひとまずおくとして、この授業でテキストとして用いる作品は Samuel Richardson（1689年生-1761年没）の *Clarissa Harlowe* である。この作品は1747年から1748年にかけて出版された小説で、全部で100万語以上の大部の作品となっており、使用しているシェイクスピア・ヘッド版では8巻本となっている。10年以上読み続けて、やっと第1巻の終わりにさしかかった。この小説の内容は、中産階級の上流の社会を背景とし、一行で言えば、女主人公クラリサがラブレイスという男にレイプされやがて死亡するというものである。何故、自殺でなく「やがて死亡する」と書かなければならないかは、宗教的、文化的、

ジェンター論的、文学的論議を必要とするのでここでは述べない。

1700年代の中葉に書かれたにもかかわらず、英語教育も兼ねてこの作品を使用しているのは、書かれた英語は、リチャードソンがロンドンで長く印刷業を営み上流階級の人々との交友があったため、例えば60年以上後で書かれたJ. オースチンの英語と較べても方言がすくなく、オースチンの英語よりも遥かに現代の‘Standard English’に近いのであって、現代英語の綴りととの差異を除いては、あまり文法事項にも差がない。所どころに、複数形と所有格の区別が無いとか、仮定法過去完了の表現に揺れが見られるとか、少し古い語義等がみられるが、前の週に次週の部分の注意事項として学生に予備知識を与えておけば問題は無い。

文学の作品としては、書簡体の小説で、その手紙を書いた人物の心の内がよく分かり、心理描写の行きとどいた心理小説としても極めて文学的評価の高い小説である。その心理の綾が多様な読みを可能にさせており、この作品を英文学教育のテキストとして使用する動機となっている。また一方で、その長さの故に日本語の翻訳が出版されていない点は、テキストとして使用する面からは、学生が翻訳を読んで理解した気分にならないという有り難い事情がある。けれども、経済的に利益が上らないとの理由でこの翻訳が日本で出版されていない事実は日本の文化的貧困さを物語っていると言えよう。100万語をこす長さのため大学の演習として、粗筋を語る必要がある反面、同じ頁を繰り返して別の年度で読まないと言う点もこの作品を読み続けている理由の一つである。

この作品の紹介として2000年に第6版がでたオックスフォード大学出版の *The Oxford Companion to English Literature*, ed. by Margaret Drabble の *Clarissa* の項目中にある一文を引用しておく。“Because of its great length, the novel has been more admired than read, but it has always been held in high critical esteem; the characters of the protagonists are developed with great subtlety, and the irresolvable nature of their conflict takes on an emblematic and tragic quality unique for its author and its period.”一言で言えば、精妙な悲劇なのである。

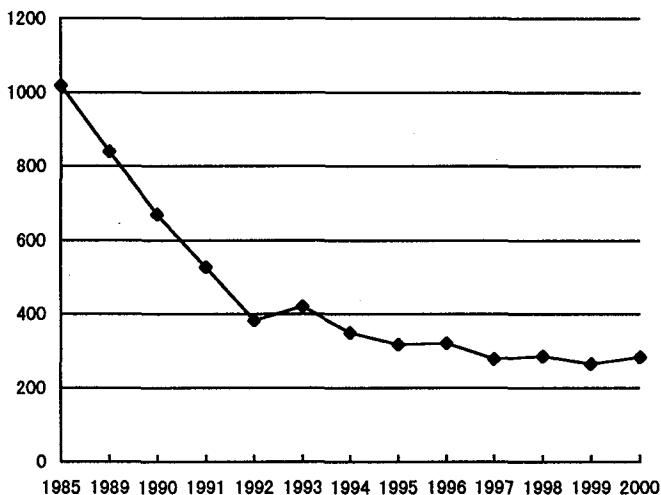
#### 4) 授業の進め方

2000年度向けシラバスの引用でこれまでの授業の進め方を示しておく。( )内は説明となる本論考の一部である。

「授業計画 18世紀中頃に書かれた *Clarissa Harlowe* を第40番目の手紙から精読をする。後の学期も順次先へと読み進む。毎回の講義の冒頭に、予習の深度と理解度を調べる小テストを実施する。(B5版の用紙を用いて、原文からの短い英文を示し、日本語訳を求める。訳のスペース以上に、学生からの説明・感想・疑問・意見のためのスペースが設けてある。ここには、英語原文に関することでも、学生の日常生活のことでも何を記述しても良いことにしている。なおこの小テストは学生を評価するためでなく、学生の読み方、誤読の仕方を見るためのものである。これは教官の側からの説明方法の反省材料になることが多く、教授法への有効な判断材料となる。時間は授業初めの10分から15分をこれに当てる。) 第1回目の講義ではRichardsonの生涯とその時代について、第2回目には第39の手紙までの荒筋について講義する。以降は学生の担当を求める。この小説は英語で書かれた最も長い小説と言われているもの。全てを演習の中で読み切ることは出来ないので、毎年部分部分を読み進む形を採用する。英語としては少し難解だが、…文学的文章鑑賞には最適の英語といえる。辞書としては中辞典レベルの学習辞書では、間に合わないのもそれ以上のものを用いる事。例えば研究社の大英和またはリーダーズ。(実際はOEDの定義を紹介することもある。)」

### 5) 広島大学学生の英語力低下の過程

経験的に学生の英語力の減退は感じていたが、それを一コマの演習・講読のなかで読み進んだ量として計測するために、この授業の一コマで読んだ文章の語数を、カンマとピリオドを除いて、カウントした。ただし、ダッシュ、；、：はかなりの意味を持つので一語と数えた。平均値はコンマ3桁を四捨五入。この結果を詳しく表にしたのが表1である。表より先に縦軸を語数/1コマに、横軸を年度とした経年変化グラフで表示しておく。



(処理上問題が残るが参考として1985年度も含むグラフとした)

表 1

年 度	平均語数/1コマ	備 考
1985 (昭和60年)	1019.00	小テスト無し。講義1コマは100分。(参考)。大学等への進学率約30%
1989 (平成元年)	840.00	小テスト開始。文部省英語指導要領の変更
1990 (平成2年)	670.33	この年まで1コマ100分。教育学部西条へ移転(2年生は東千田キャンパス)。大学等進学率30%強から緩やかに増加傾向となる
1991 (平成3年)	526.13	この年以降1コマ90分。この年度の学生から西条キャンパス移転が関係し始める。年度末に、1年生、2年生を教える総合科学部の西条移転完了
1992 (平成4年)	382.67	元の計画ではこの年度に文学部は移転のはずだった
1993 (平成5年)	420.22	
1994 (平成6年)	349.75	文学部西条へ移転。植木在外研究のためこの年度だけ後期がサンプル
1995 (平成7年)	317.00	
1996 (平成8年)	320.89	
1997 (平成9年)	277.25	大学等への進学率40%強となる
1998 (平成10年)	285.75	
1999 (平成11年)	264.44	大学等への進学率の増加足踏み現象
2000 (平成12年)	283.33	2000年度前期。大学等進学率45.1%
2000 (平成12年)	171.86	2000年度後期から教育方法を変更。意図的に読み進む速度を緩めた

グラフによって明らかなように、1992年度（平成4年度）まで読んだ語数が急速に減少し、1994年度（平成6年度）以降じりじりと減少こそすれ、回復の気配はみられない。表の備考に示したのがこの現象と関連があるかもしれないと思われる事項である。大学等への進学率は文部科学省のホームページ <http://www.monbu.go.jp/stat/r316/tk0106.gif> から読みとった数値で、グラフの一部をIIの1)で映像として必要部分を引用した。

## II. 英語を読む力の後退減少の原因

このセクションではこうした現象が発生した理由を考察してみる。既にI. 5)の表1の下に記しているように、表1の備考欄に関係のあると推測される事項を付しておいた。それをここで丁寧に考究しておきたい。

### 1) 高等教育の普及・大学の大衆化

上述したように備考欄の中で、文部科学省が公開しているホームページ「就学率・進学率の推移」から大学等の進学率を読みとり要点を備考に数値を入れておいた。ここで少し説明を加えるなら、大学等（短期大学を含む）への進学率は、3年前の中学校卒業生数に対する比率であって、同世代の人口に対する進学率となる。単に高等学校を卒業した人数に対する大学・短期大学への進学率は1999年度、2000年度とも49.1%に達している。この関係を表2にまとめると以下のようになる。数値はグラフの読みとりによる。また忘れてならない要因に1974年（昭和49年）を頂点とし、それ以降の出生数の低下がある。これが大学に及ぶのは1993年（平成5年）以降である。現在、多くの私立大学は厳冬の中にあるのだ。

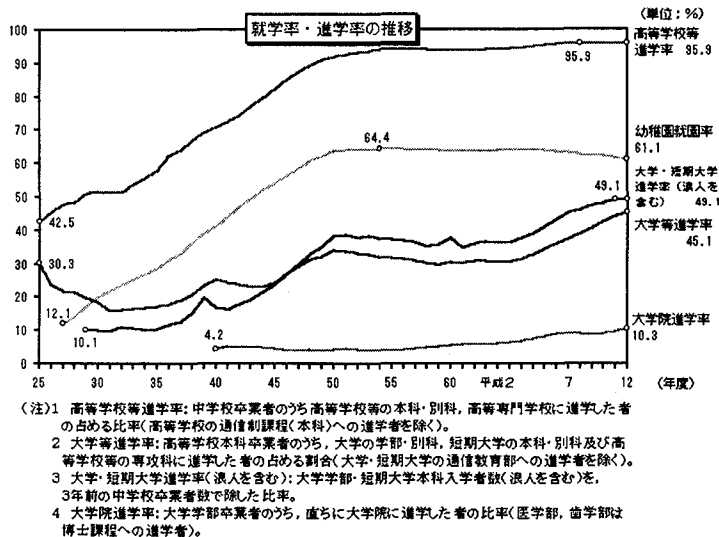


表 2

	1985年	1990年	1997年	2000年
同世代比率	30.0%	31.0%	40.0%	45.1%
高卒対比率	38.0%	37.0%	47.0%	49.1%

1999年度（平成11年度）と2000年（平成12年度）度は高等学校卒業生に対する大学・短大等への進学率は同じ49.1%と足踏み状態であるが、1990年度（平成2年度）から1995年度（平成7年度）にかけては一貫して上昇している。それに対して、同世代全体に対する比率は1990年度（平成2年）から2000年度（平成12年度）にかけて一貫して右上がりになっている。変動に少しの差異は認められるが上昇傾向と言う点では同じで、大学への進学率が50%になる日が近いように思われる。

英語学力の低下は最近の8年間少しずつ進行しているが停滞傾向にあり、1989年度（平成元年度）から1992年度（平成4年度）にかけての急激な低下はみられない。

以上の事象を考慮にいれて見ると高等教育の普及拡大、いわゆる大学の大衆化が広島大学における「イギリス近代文学演習」を受講している学生の英語力の低下に直接的に連動していないように見える。ただ、いずれの大学進学率も上がり続けており、英語学力が、その大学進学率の上昇に正確に逆比例の関係対応をしていないとはいえ、減退の傾向にあるとのマクロの視点に立てば、その影響はあると考えて良い。別言すれば、大学進学率上昇による従来の高等教育に不適應をおこすかも知れない大学生の増加と言い換える。残念ながら日本国内でトップレベルの偏差値の学生を引き付ける魅力に欠ける広島大学は、これまで考えられなかったレベルの英語学力の学生を入学させなければならない現状にあると判断している。

## 2) 学習指導要領の改訂

第二の理由は文部省の「指導要領の改訂」である。小・中の義務教育において日本は早くから、高い就学率を遂げてきている。1975年（昭和50年）当たりから高等学校の就学率は95%当たりを維持してプラトー状態となっている。その高等学校への進学率の上昇に合わせて、当時の文部省は英語の語彙数に付いて次第に総語彙数を減らす政策を採ってきている。否、減らさざるを得なかったのである。

### 文部省学習指導要領の改訂

昭和26年の改訂による指針，中・高等学校で3300語から6800語

昭和35年の改訂による指針，中・高等学校で4700語から4900語

昭和45年の改訂による指針，中・高等学校で3350語から4700語

昭和52年の改訂による指針，中・高等学校で2300語から2950語

平成元年の改訂による指針，中・高等学校で1900語から2900語

またこのときの改訂で英語の科目が下記の表のように変更された

表3

改 訂 前	改 訂 後
英語 I	英語 II
英語 II	英語 II
英語 II A	オーラル・コミュニケーションA オーラル・コミュニケーションB オーラル・コミュニケーションC
英語 II B	リーディング
英語 II C	ライティング

文部科学省からは既に次回、2002年（平成14年）の改訂による指針で、中学校の必須単語を100とし、三年間で900語とする指針がしめされた。1年後に高等学校の改訂が予定され、それが大学に2006年度から及ぶ見込み。すでにこれに気付いておられる英語教育関係者は「2006年問題」と呼んで対応策を考え始めている。

これらの事を考えてみると、1989年（平成元年）の「高等学校学習指導要領」の改訂・変更が、3年の期間において1992年度（平成4年度）からの1コマの演習で400語を下回り、回復しないまま、微減状態である現象と大きな関連のあることが読みとれるのである。正確には、この「授業科目」は2年生用なので1993年（平成5年）から顕在化するはずであるが大学移転等の要因が絡みあってか、1992年度（平成4年度）から広島大学では現像化している。したがって、これから先の大学における教養的教育内での英語教育における発想の転換は、できる限り速やかにおこない、さらに2002年度からの改訂に備えなければならないであろう。要点は、語彙数の減少とオーラル・コミュニケーション重視の、中・高等学校のカリキュラムを出発点とし、コンピュータによるメディア・コミュニケーションも視野にいれて、コミュニケーション媒体としての言葉という観点から、教育方法を見直し、語彙数を増加させなければならない。日常生活はともかく、日本にいて視聴できるようになった英語でのニュース（例えば、CNN、BBC、NBCの生のニュース）の理解も、この語彙数ではおぼつかない。まして研究のレベルで十分というレベルに到達しようとするならばなおさらのことである。

田中正道・山田純の調査によれば、広島大学工学部の2年生を被験者として、英語語彙量の測定を行ない、その結果を、『広島外国語教育研究』（広島大学外国語教育研究センター）の第1号（1998年）に公表している。

表4 学生の英語語彙量

	トークン数（語の生起例）	語彙量（基本形）
下位群	3,910	2,473
上位群	6,706	5,652
群全体	4,964	3,293

文部省の指導要領の数値と比較するなら、広島大学の学生は相対的に見れば、レベルが大きく下ったとはいえ、まだかなりポテンシャルティは高いと見て良からうと判断する。したがって、教育方法の工夫次第で英語の語彙を増やす余地と楽しみが残っていると考えられるのだ。

このセクションでは、「イギリス近代文学演習」を受講する学生の学力の低下を文部省の「学習指導要領」の改訂との関係で、考察した。その結果1989年（平成元年）の改訂が3年後からグラフ上に明瞭に現れていると判断する。

### 3) 広島大学のキャンパス移転

上記の要因のほかに、広島大学固有の問題が1989年度（平成元年度）から1992年度（平成4年度）の間にあったと考えられる。そうでなければ、この間のグラフに現れた急激な下降線は説明が付かない。そこで思い至るのが広島市の中心地にあった東千田キャンパスから東広島市の西条キャンパスへの移転である。当初の、とは言っても20年近くかかった移転は、途中何度も移転計画は延期され、移転する学部の順序も変更されたのだが、ここで問題にしている1コマ当たりの

語数のグラフに関係する時期の移転計画では文学部の移転は、教育学部の移転後2年で実行されるはずであった。結局文学部は、教育学部より4年遅れて移転したが、体感的には教育学部が移転する4年前(1988年)あたりから学生の英語力の減少に気付いたように思う。それが単なる個人の幻想なのか、学習指導要領の改訂故なのか、4年次を西条で学ぶ事を考慮に入れた高校生がいたのか、判然としない。がしかし、「広島大学西条へ移転」の風説に怯えた高校生が1985年あたりから出始めたと推測される。詳細なデータを持っておられる方の解析を心待ちにしている。大学入試センターか、どこかの予備校のデータをみてみたい。データは合格可能な偏差値の形で残っているはずだ。

東広島市が12万を超える人口を持つに至ったことは喜ばしい。都市の人口に、語学教育の論考が及ぶとは思っても付かないことであるが、都市と大学という視点に立つならまことに自然な発想であり、論究したい問題点であるが、「東広島市を50万都市に」という命題の是非はこの論考の目指すところではない。私が、この論を考察する前に、いくつかの参考文献を読んだが、どの本、論文もこうしたマクロの視点からの英語教育論は無く、ほぼ全て技法論に陥っているのは悲しい現状である。

移転統合が実現した訳であるから、英語力減少の要因分析をした後は、どのような教育をこの現状の中で実践していくのかが問われることになる。ゆえに次章で「イギリス近代文学演習」に立ち返って問題解決への考察をすすめたい。

### III. 教育方法の模索

#### 1) 2000年度前期までの取り組み

「はじめに」の中で、イギリス散文学教育の枠組についてふれたが、「イギリス近代文学演習」の授業は、英文学教育の範囲で行われるのだが、学生の自学自習を考えて1989年(平成元年)から、小さなことだが、幾つかの工夫をこの演習ではとれ入れている。その幾つかを列挙し、その意図を述べておきたい。

##### ① 授業での進む範囲を早めに学生に明示しておくこと。

1985年度の学生には行っていなかったことである。当時の学生は進む範囲を決めておかなくても、自らの判断で予習をしてきた。それが1989年(平成元年)の頃から、こちらが次回、次々回の計画を明示しておかないと予習して来ない学生が増え始めたための措置である。この辺りに現在、全ての大学の講義でシラバスが求められている理由の一部があるものと考えている。

##### ② 講義の終わりに次回に進む範囲の注意すべき点の説明。

教科書版が出版されていたら、注釈を付すべき部分、すなわち難易語・難解な文構造を読み解くヒントを与えておく。とくに Oxford English Dictionary でしか語義の定義のない単語は、これが必要である。サイテーションのある時はそれに言及するだけで学生が能動的に OED に当たることの期待もこめている。

##### ③ 文学的留意点の指摘

長い小説なので、コンテキストから判断すべき文学的描写には注意を払うように、必要なインフォメーションを与えておく。文学的な解釈作業に入るには肝要な事柄で、西条に移転する以前は、これによって啓発される教育学部生が多く特に二年生の後期を終える頃には小テストの感想欄に、「文学的文章を読む楽しさを実感した」と言った旨の意見が多く見られた。文学部が英語教育に携わる必要のある所以だと考えている。この点において、広島大学での教員養成



に理学部と文学部が深く関与してきたこれまでの意義は大なるものがある。他大学に見られなかった、広島大学のユニークさだったと言ってもよい。2000年度入学生から制度変更が始まったが、実態は悲しむべき方向に動き出したと予測している。

#### ④ 講義中に辞書を引く作業を導入

注目すべき語法は持参の辞書をクラスで一緒に引くことによって、英語語法上の現象認識の深化に役立てる。時間を取られるので、講義演習中にはやりたくない作業であるが、これもこの演習のこうした作業から、学生が能動的に辞書を引く、(最近ではノート型パソコンや電子辞書の出現で、「辞書を作動させる」という意味の新語、「電子レンジでちーんする」といった動詞が生まれるかもしれない。)行為の面白さに気付いてくれたらとの願いが入っている。

#### ⑤ 講義の録音の許可

この講義を始めて3年目当たりから小型の録音機を持ち込む学生が増えてきた。熱心な学生ほど録音を取ろうとしている。学生の手抜きでなく、実は講義・授業での話言葉は、砕けた話口調を使用していないか、注意して話をしていても所詮書き言葉ではないのであって、レコーダからの言葉の掘り起こし作業は大変な作業である。それでも録音を取りたいという学生には許可を与えている。一時期、10台近くが学生机の上に並んでいたが、現在2台くらいである。熱心な学生が減少したのかもしれない。

事のついでに言えば、教官の訳した日本語が、分からないと言う学生が増えてきたことも近頃の学生の新現象である。ときに書簡の文体に合わせて、文語的表現をすると理解できない学生が出現し始めた。幸い学生が、小テストの意見欄・感想欄に意見・不満を記しているが、これはむしろ本来は日本語教育の領域の問題であろう。それとも学生と教官の年齢差の故に、学生からいうと、「死語」「化石語」の類が頻出しているのかもしれない、が、これも学生への国語教育の一環として前向きに捉えることが、この演習を生かすことになるのであろう。最後は自戒の弁となる。

#### ⑦ 授業冒頭の小テスト

章I 4)の「授業の進め方」のセクションでも述べたように、学生の予習と自らの読解でどの程度読めているか、また教官が予測する難易点と学生の直面する問題点が一致するかどうかの小テストであって、この小テストを使ってはいっさい成績評価は行っていない。むしろ教官の授業方法模索の一環であると認識している。その意味で「説明・感想・疑問・意見」の欄は教官にとって有意義で、同時に学生とのコミュニケーションの場でもある。最終的な成績評価は学期末の試験によっている。

後期に受講生が20名台になったときは、問題点をチェックコメントを加えて学生に一度もどして確認した後、また回収している。多人数の時は実行が時間的に不可能なので中止している。

#### ⑧ 期末の試験

評価のための期末試験にはいわゆる「穴埋めテスト」をできるだけ導入している。日本語訳や、誰のどのような文章なのかを問うだけでは、英語の力がつくだけでなく、単なる日本語の暗記になることを恐れているからである。

この「穴埋めテスト」が、多くの文献でクローズ (cloze) テストと呼ばれている英文読解力評価テストと同一とは必ずしも言えないであろう。一般的には、初見の英文の原文に空欄(その空欄も一定間隔で設けるものや、任意の部分に空欄を設けるなど一定していない。)を設けて選択肢を与えている。期末の評価テストでは、英語の文章の内容説明は授業の中で済ま

せているので、穴埋めテストではたとえ固有名詞といえども選択肢を与えていない。しかし、これまでの実践例から「穴埋めテスト」は、日本語訳による理解力のテストと相関関係が高いと判断している。この意味では下記の「穴埋めテスト」もクローズ・テストの内に入れて良からうと考察している。この期末試験に興味を持たれる方のために、以下に2000年度前期末の実例と結果を示しておきたい。

## 2) 2000年度前期末の試験

作品からの日本語訳を求めたのは次の3つの英文である。

1. You say, I must have argued with myself in his favour, and in his disfavour, on a supposition, that I might possibly be one day his. I own that I have: And thus called upon by my dearest friend, I will set before you both parts of the argument.
2. And then has the secret pleasure intruded itself, to be able to reclaim such a man to the paths of virtue and honour: To be a *secondary* means, if I were to be his, of saving him, and preventing the mischiefs so enterprising a creature might otherwise be guilty of, if he be such a one.
- 3.—Reflecting upon these things, I cannot help conjuring you, my dear, to pray *with* me, and to pray *for* me, that I may not be pushed upon such indiscreet measures, as will render me inexcuseable[sic] to myself: For that is the test, after all. The world's opinion ought to be but a secondary consideration.

配点は60点とした。受験者47名で内訳は文学部22名、教育学部25名。この部分の平均点は60点満点の50.622126点で、%にすると84.37021%となった。作品中では容易な文章から出題している。

穴埋め問題としたのは次の2問である [正解は ( ) の後に記しておいた。]

- I. And I (1) upon me to say, that (2) they opposed to him a man of sense, of (3), of generosity; one who enjoyed his fortune (4) credit; who had a tenderness in his nature for the calamities of (5), which would have given a (6) assurance, that he would have been still less (7) in grateful (8) to an obliging spirit: Had they (9) such a man as this (10) Mr. Lovelace, and been as (11) to have me (12), as now they are, I do not know myself, (13) they would have had reason to tax me (14) that invincible obstinacy which they lay to my (15): And this whatever had been the (16) of the man; since the (17) is what we women should judge (18) in the choice we make, as the best (19) for the party's good (20) in every relation of life.

[解答例]

- (1) take (2) had (3) virtue (4) with (5) others (6) moral (7) wanting (8) returns (9) opposed (10) to (11) earnest (12) married (13) if (14) with (15) charge (16) *Figure* (17) *Heart* (18) by (19) security (20) behaviour

- II. A great deal of the treatment a Wife may (1) from him, will possibly (2) (3) herself. Perhaps

she must *practise* as well as (4) obedience, to a man so (5) used to (6); and must be careful to oblige. And what Husband expects not this? — (7) *more* perhaps if he had not reason to assure himself (8) the preferable Love of his Wife before she became such. And how much easier and (9) to obey the man of her (10), if he should be even (11) sometimes, than one she would not have (12), could she have (13) it? Then, I think, as the men were the framers of the Matrimonial Office, and made *obedience* a part of the woman's (14), she ought not, even in *policy*, to shew him, that she can (15) thro' *her* part of the contract (however lightly she may (16) of the instance) (17) he should take it into his head (himself his (18)) to think as (19) of other points, which she may hold more important — But indeed (20) point so solemnly vowed can be slight.

[解答例]

(1) expect (2) depend (3) upon (4) *promise* (5) little (6) control (7) The (8) of (9) pleasanter (10) choice (11) unreasonable (12) had (13) avoided (14) vow (15) break (16) think (17) lest (18) judge (19) lightly (20) no

フェミニズムの観点からは許し難いクラリサの手紙文かもしれないが、見事な文章である。採点の時の配点は40点で、意味の通る文章になるなら原文にはこだわらないし、スペリングのミスも部分点を配して評価した。日本語訳の学生と同じ27名の学生で平均点は40点中の27.052点であった。%に直すと67.63%となる。

日本語訳だけを覚えていたのでは、答えにくい試験であり、学生の英語学習を促進する試験となっている。また点数配分は違っていても平均点を%で表すことによって比較するなら、学生にはクローズ・テストの方が難しかったようで、英語の学力は、クローズ・テストの方に正確に反映されていると判断して良からう。

前段落の結論を検証するため、ここで47名の日本語訳とクローズ・テストの偏差値を出して比較することにより、読解力との相関関係を比較してみたい。被験者を E1, ... En と表示し、日本語訳の結果を先ず100分率に直した数字を示し、次の隣接する右縦欄で偏差値を示した。右側の2つの縦欄では、クローズ・テスト（穴埋め問題）の結果を同様に表示した。その結果が次の表5である。

表5 2000年7月の期末試験のデータ表

(日本語訳)		(クローズ・テスト)			
%平均数値	84.37021		%平均数値	67.63191	
標準偏差	14.4303	縦列偏差値	標準偏差	26.36113	縦列偏差値
Example 1	90	53.90137	Example 1	86.3	57.08167
E2	75	43.50657	E2	50	43.3114
E3	95	57.3663		92.5	59.43362
*E4	83.3	49.25836		33.8	37.16599
E5	95	57.3663		83.8	56.13331
E6	98.3	59.65315		81.3	55.18494
E7	96.7	58.54437		91.3	58.9784

E8	93.3	56.18822	82.5	55.64016
E9	83.3	49.25836	66.3	49.49475
E10	95	57.3663	92.5	59.43362
*E11	83.3	49.25836	40	39.51794
#E12	93.3	56.18822	98.8	61.8235
*E13	86.7	51.61451	52.5	44.25977
*E14	26.7	10.03534	18.8	31.47579
E15	98.3	59.65315	96.3	60.87514
E16	95.5	57.71279	100	62.27873
*E17	63.3	35.39863	0	24.34408
E18	91.7	55.07944	86.3	57.08167
#E19	80	46.9715	75	52.79506
*E20	83.3	49.25836	20	31.93101
#E21	73.3	42.32849	83.8	56.13331
*E22	86.7	51.61451	55	45.20813
E23	93.3	56.18822	90	58.48525
E24	86.7	51.61451	77.5	53.74342
E25	43.3	21.53891	5	26.24081
E26	91.7	55.07944	93.8	59.92677
E27	98.3	59.65315	95	60.38199
#E28	85	50.43643	82.5	55.64016
E29	95	57.3663	88.8	58.03038
E30	96.7	58.54437	93.8	59.92678
#E31	73.3	42.32849	82.5	55.64016
#E32	81.7	48.14958	90	58.48525
E33	95	57.3663	92.5	59.43362
#E34	60	33.11178	40	39.51794
E35	88.3	52.72329	76.3	53.28821
#E36	71.7	41.21972	63.8	48.54638
E37	61.7	34.28985	18.8	31.47579
E38	76.7	44.68465	45	41.41467
*E39	93.3	56.18822	53.8	44.75292
#E40	76.7	44.68465	70	50.89833
*E41	81.7	48.14958	38.8	39.06272
*E42	91.7	55.07944	66.3	49.49475
E43	90	53.90137	75	52.79506
*E44	100	60.83123	76.3	53.28821
*E45	93.3	56.18822	61.3	47.59801
*E46	80	46.9715	38.8	39.06272
E47	93.3	56.18822	76.3	53.28821

全部で47例の中で偏差値の絶対値の差が5ポイント以上になる物は22例で残り25例は互いに近似しており、クローズ・テストと読解力の相関関係は高いと言って良いであろう。穴埋め問題の方の偏差値が5ポイント以上高い例（#印が被験者の番号に付けてある）は9例で、英語教育と

いう観点からはむしろこうした学生の方が望ましいのかもしれない。逆に、日本語への訳が5ポイント以上高い学生(\*印が被験者の番号に付けてある)は日本語の感覚が文学的に鋭敏なのか、日本語をただ暗記した可能性もあるのかもしれない。

以上のように考えてみるなら、クローズ・テストの平均素点の向上が、学生の読解力の向上に役立つものと判断して良い。

### 3) 一斉朗読の導入

これも「はじめに」で述べておいたが、1985年当時の学生は、指名すればかなりのアーティキュレーションとリズムで読むことができた。ところが現在では発音で苦勞をしている学生がみられるようになってきている。したがって授業の中で、個々の学生の発音指導ができれば良いのだが、英文学演習の中では無理と判断し、文節に区切りながら、教官の朗読を、繰り返す形での学生一斉朗読をもって、せめてもの練習になればと、2000年度後期から実施することとした。それとともに朗読に時間を費やすために、作品を読む進度を落として、平均171.86語/1コマまで下げた。このことによって講義の始めに、前回進んだ文章と、当日読み進む文章を通して一度朗読し、改めて当日の部分の朗読をもう一度繰り返したあとで、小テストを行っている。小テストはこれまでのように内容の予習レベルのチェックするものと、クローズ・テストによる物とを混ぜて使用している。授業の最後に再び一斉朗読を2度行うよう努力しているが、時間不足でしばしば1度の一斉朗読になっているのが心残りである。認識の深度を深めるには音読の効果は予想以上のものがあると分かってきた。

### 4) 音読とクローズテストの関係

第1回目の試みとしてクローズ・テストの小テストを行ったときは、3回音読の後で試験を試みてみた。37名の被験者で20の空欄の穴埋めをおこなった。不意打ちであったが、正解率の平均は69.96%であった。この試み自体は2000年度7月の期末テストの結果と大きくは異なっていない。しかし、それ以後の演習の展開を見ていると学生の英語そのものへの集中力が増してきたと判断している。学生の、また教官の意識の変革と言えるのかもしれない。

この第1回目の学生の、感想と意見が面白いので六つほど紹介しておく。

- [1] いきなりだったのでびっくりしました。でも訳より、穴うめの方が好きかもしれません。
- [2] repeat 練習なんて久々で、高校のころを思い出しながら楽しみ(?)しました。けれど、英語レベルは全く異なり、読みの早さに頭はついていきません。
- [3] 3回リーディングをただで意外と覚えていたので驚いた。
- [4] 3回読んだだけで意外と多く覚えているものです。
- [5] リーディングすると今までよりはるかに単語を覚えやすくなりました。(きっとリーディングしたあとすぐだったので頭に少し入っていたと思います。)
- [6] リーディングは楽しいです。

古典的な方法だとは思いますが、現在の学生の実情からいうと有益で学生も楽しみながら学んでいるようである。

第2回目の試み。音読の効果を確認するため、同じ作品 *Clarissa* の文章を説明した後に、教官に、続いて文節毎に、3回音読のかたちで学生が朗読して(A)のクローズ・テストを行った。テ

スト回収後、同じ形式で3回音読による朗読をした。それから同じ箇所の英語の原文でありながら、少し難易度をあげた(B)のクローズ・テストを行いその結果を比較した。

(A) But I (1) then to say, and I still am (2) opinion, that he wants a *heart*: And if he does, he (3) everything. A wrong *head* may be convinced, may (4) a right turn given it: But who is (5) to give a *heart*, if a heart be wanting? Divine (6), working a miracle or (7) to a miracle, can only change a bad heart. Should not one fly the man who is (8) *suspected* (9) such a one? What, O what, do Parents do, when they endeavour to force a child's (10), but make her think (11) than otherwise she would think of a man obnoxious (12) themselves, and perhaps whose character will not stand (13)?

I have said, that I think Mr. Lovelace a vindictive man: Upon my (14), I have sometimes doubted, whether his perseverance (15) his addresses to me (16) not been (17) more obstinate, since he has found himself so disagreeable to my (18).

From that time I verily think he has been more fervent in them; yet courts them (19), but sets them (20) defiance.

(B) But I used then (1) say, and I still (2) of (3), that he wants a *heart*: And if he (4), he wants everything. A (5) *head* may be convinced, may have a right turn (6) it: But who is able to (7) a *heart*, if a heart be wanting? Divine Grace, (8) working a miracle, or (9) to a miracle, can only change a bad heart. Should not one fly the man who is (10) *suspected* of (11) a one?

What, O what, do Parents do, when they endeavour to force a child's inclination, (12) make her think better than (13) she would think (14) a man obnoxious to themselves, and perhaps whose character will not (15) examination?

I have said, that I think Mr. Lovelace a vindictive man: (16) my word, I have sometimes doubted, whether his perseverance in his (17) to me has not been the more obstinate, (18) he has found himself so disagreeable to my friends. From that time I verily think he has been (19) fervent in them; yet courts them not, but (20) them at defiance.

(A)の(7)(8)と、(B)の(9)(10)は同じ箇所が開けてある、7・9は(next)が8・10は(but)が答えとなる。特にこの(but)は文意を取る上で重要な箇所であり同じ所を聞いている。通例ならば(B)の方が動詞とその派生形を尋ねており、(A)より(B)の方が難易度が高く、幾つかの解答が考えられる問題となっている。被験者は35名で文学部生と教育学部生から構成されていた。

結果は

○(A)の平均は100分率で75.99%の正解率であった。さらに3回音読による朗読したのちに行った(B)のテストでの正解率は81.79%の正解率に上昇した。すなわち、5.88%の正解率のプラスとなって現れた。

個々に見るならば

- 正解率がプラスとなった学生は21人で内20%から30%プラスになった学生が5名あった。
- 変化の無かった学生は4名であった。
- マイナスになった学生は10名で、その内25%が20%になった1名の学生を除いては(A)の正答率が高く、97.5%から100%の学生が5名であり、減少が見られても誤差の範囲内と呼べるレベルである。

結論として音読による一斉朗読ではあっても、学生の認識度はかなり上昇することが分かった。

これからは、演習の講義でも活用していこうと考えている。

さらにこの後、同じ授業の時間帯で、クローズ・テストに用いた英語原文の一部を日本語に訳させてみた。

“What, O what, do Parents do, when they endeavour to force a child's inclination, but make her think better than otherwise she would think of a man obnoxious to themselves, and perhaps whose character will not stand examination?”

この文章は、仮定法と、比較の文章、否定形（この箇所では修辭疑問文になっているので同じ事になる）が全て入っており、それに、‘but’が使われて切り返しているのです。体験的に言ってほとんどの学生が意味を取れなくなる箇所である。ところがこうしたクローズ・テストの後で、小テストをしたら次のような訳文を37名のほとんどの学生が書いていた。もちろん色々な表現があるのだが、その内2例だけ挙げておく。

日本語訳の例：

〔言語学の学生〕「ああ、一体親というものは、こどもの好き嫌いの傾向を強制するときに、そうしなかったならば彼女はその男が両親にとって不快で、おそらくその男の性格は、審査に耐えられないだろうと思うだろうその男を、それより良く考えさせてしまう以外に、一体何ができるというのでしょうか。」（原文通り転写）

〔英文学の学生〕「両親というものは、こどもの好き嫌いというものを強制しようとした時に一体なにができるのでしょうか。かれらが彼女に強制し〔な〕かったら、不快なひとだと思ふような人や、その性格が細かい吟味にたえることができないであろう人をよりよく思わせることでしょう。」（〔た〕の誤記を〔な〕に一カ所訂正。他は原文通り転写）

まだ推敲の余地はあるが、通例の授業ははじめの小テストでの、意味の通らない日本文とは見違えるほどである。これほどの学生側の理解は、授業での説明と、音読による深いレベルでの認識への到達、自己が納得したかたちでの理解がこれを支えていると考察している。

## 結論にかえて

英文学の教育も、その中で、英語教育と重なり合う部分があるし、たとえ、コミュニケーションのメディアとしての英語教育からみても学習者の英語語彙量の増大など、互いに微妙に関わり合っている。現場での教育にこれで十分という地点はないのであって、学習者との関係の中で、彼の能力と教育者の力との相対的關係の中で、絶えず修正を試みながら改善をしていかなければならないのであろう。学習者が極めて能動的である場合、問題は顕在化しないと考えられるが、教官の意図と学生の目的意識が齟齬をきたしては不幸であろう。工夫はこれからも続くのである。

本論考においては、英文学の演習の中でのこれまでの工夫と、新たに取り入れた、正しくは、取り入れざるを得ないほどの事態認識と原因への洞察から、音声指導の、声に出しての朗読指導導入の成果を客観的に測定しようとしてきた。授業目的が変われば状況はがらりと変わる。あく

までも「イギリス近代文学演習」の中でのことを記述してきたが、それでもなおも残るのは、教官からいえば相対的關係を形成する学生からの反応である。

最後に学生に対して行ったアンケートを示して論の纏めとさせていただきます。学生は32名。

実施日2000年11月21日	大変役に立つ	少し役に立つ	役に立つ	役に立たない	どちらとも言えない
1 次回の授業の範囲の明示	28	2	2	0	0
2 次回の範囲の難易語等の説明	22	6	3	1	0
3 今日学週する部分の小テスト	4	10	8	3	7
4 小テストは教官とのコミュニケーションとなるか	4	9	14	1	4
5 小テストは授業後の理解度テストにすると良いか	11	3	7	0	11
6 文学的作品での音読の練習	20	5	7	0	0
	大変ある	少しある	ある	無い	どちらとも言えない
7 文学作品での音読と内容理解の關係	10	12	5	0	4
	大変良い	よい	普通	おそい	速すぎる
8 音読の速さ	8	15	9	0	0
	大変良い	よい	普通	少ない	多すぎる
9 音読の回数3回	9	16	6	0	1
	おもしろい	役に立つ	普通	良くない	単位の關係で受講
10 英語の難しさを別にしてこの授業は面白い	12	9	9	0	1

自由記述での意見はあまりにも多岐に渡っており、記述は割愛させて頂くが、音読に否定的な意見は一つもなく、肯定的な意見が多かった。また大学の英語教育の中で音読は珍しいものであるとの新知見をこのアンケートから学ぶことができた。また小テストは講義の終りにも行なう必要があると判断している。最大の難問は限られた時間で、時間に苦しむことになろう。これ乗り越えるためにインターネットを用いて、ホーム・ページを利用するか、Web CT の活用を2001年の4月から行ないたいと考慮中である。

## 参考文献

- 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ、『学習者中心の英語読解指導』大修館書店、1992  
 天満美智子、『英文読解のストラテジー』大修館書店、1989；1990  
 金谷 憲 編、『英語リーディング論』河源社、1995  
 高梨康雄/高橋正夫、『英語リーディング指導の基礎』研究者出版、1987  
 田辺 薫、『英文読解のプロセスの指導』溪水社、2000  
 大学英語教育学会 文学研究会 編、『英語教育のための文学案内事典』彩流社、2000  
 『広島外国語教育研究』第1号（広島大学外国語教育研究センター）1998



Abstract

**Using Literary Materials in English Literary and Language Education at Hiroshima University: Practical Innovations for a Seminar in *Clarissa Harlowe* by Samuel Richardson, with Special Reference to the Relation between Literary English Comprehension and Reading Aloud Practice**

Kensuke Ueki (Faculty of Letters) &  
Akira Ono (Faculty of Education)

Ueki's long-term observations instigated us to systematically analyze the English reading abilities of students in Ueki's seminar on *Clarissa Harlowe* by Samuel Richardson. Over the years, classes have consisted of students majoring in English Literature and in Teaching English as a Second Language. Compared to 10 years ago, Ueki tells us that students these days have more difficulty reading the text of *Clarissa*. The researchers calculated the average number of words that were read in one session from the academic years 1989 to 2000 (also those in 1985), the results of which are shown in the Table 1. The results indicate a clearly downward trend. We can notice a drastic decrease in the number of words read each semester from 1985 to 1992, and a gradual decrease from 1992 through the current academic year.

The worsening of reading abilities may be attributable to popularization of university education. This tendency is closely connected with the decrease in the total number of 18-year-olds, a trend which started in 1993. Because of these combined causes, there has been a deterioration in the quality of education in nearly every academic field in Japan.

Another reason is the "brilliant, generous, and tolerant change" in directives issued by the Ministry of Education, especially concerning the teaching of English vocabulary. Today, fewer vocabulary are taught in secondary schools, probably because of the high ratio of students who go on to high school (though actually now it might be better to call it "low school"). The ratio is 95.9%.

Another significant reason for the worsening of reading abilities at Hiroshima University is the move from the downtown Hiroshima Campus to the Higashi-Hiroshima Campus. The authors cite reasons why this removal has contributed to the drastic decrease in reading abilities from 1985 to 1992.

Ueki has already introduced some means to improve the comprehension of the difficult text, *Clarissa*. In the latter part of the academic year of 2000, he introduced a method of reading aloud together after the teacher's model reading. With the help of a kind of cloze test procedure, we detect a palpable improvement in student comprehension of the work both in terms of literary appreciation and English language.